

平成十九年度金沢大学資料館・附属図書館特別展



教える 学ぶ

師範学校と  
いしかわの  
教員養成史



## 目次

開催にあたって	
前身校を発掘する資料館(宮下孝晴)	1
教員養成の過去とこれから(江森一郎)	2
教員養成の歴史と教育	4
コラム・戦後石川における教員養成の選択肢	
―戦後の石川師範学校―(谷本宗生)	
師範学校蔵書に見る教科書と地域出版	6
郷土教育	8
女子教育	9
青年教育	10
特別科学教育	11
学生たちの生活	12
コラム・明治時代の「体操」と用具(大久保英哲)	
出品目録	14
年表	16

## 前身校を発掘する資料館

金沢大学資料館は、角間への総合移転にもなつて金沢城址内の旧キャンパスにあつた、とくに石川門・三十間長屋・鶴の丸倉庫で保存されてきた諸資料を収蔵管理する目的で設立されました。しかし、創設当初はキャンパス移転にもなつて各研究室の片隅で眠っている(すでに歴史的資料としての価値が出てきた)各種機器を廃棄せずに収蔵しておこうという現実的な目的に追われることになりました。それでも、平成十一年(一九九九)金沢大学創立五十周年記念を迎える大事業の一環として、本学の歴史を資料とともに整理して、現在から未来を見据える地平づくりが本格的に着手されました。大学を挙げての一大事業でしたが、モノという实在資料の収集や整理は資料館の責任において実施され、現在も継続されています。

好評を博した昨年度特別展「四高開学百二十周年記念展示―学都金沢と第四高等学校の軌跡―」はまだ記憶に新しいことですが、これは金沢大学の前身校発掘プロジェクトの第一弾でした。今年度は第二弾となる「教える×学ぶ―師範学校といしかわの教員養成史―」展示と地域の教員養成に関わる歴史的シンポジウムの開催が、附属図書館との協力で実現することとなりました。

## 開催にあたって

明治七年(一八七四)八月、小学校教員養成のため、兼六園成巽閣石川県英学校内の一画に石川県集成学校が創設されたのが県内の教員養成の始まりです。

集成学校は同年十一月、石川県師範学校と改称し、変遷をたどりながら、昭和十八年(一九四三)、石川師範学校(男子部・女子部)として再出発しました。同十九年、金沢高等師範学校が設置され、石川青年師範学校も開校しています。これらの各師範学校は昭和二十四年の国立学校設置法に基づく新制大学設置により、金沢大学に包括され、教員養成機能は教育学部へと引き継がれ、県内外の教育界に多くの人材を輩出してきました。

金沢大学では、平成二〇年度から、従来の学部を中心とした教育体制を新たに「3学域・16学類」に再編成します。これは、「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」をめざす本学が、幅広い視野を持つて課題を発見・解決し、社会に貢献する人材の育成を企図して行う大きな挑戦です。今回の展示会は、これを機に各師範学校の歴史とそこで行われた教育を検証し、近代日本の国家・社会・地域における教育の在り方を理解することによって、現代の教育について考えを深める契機とすることを目的としています。さらに、教育に熱心だった石川県との歴史的な関わりに焦点を当てることで、「学都」としての地域の新たな魅力を、より多角的な面から発見する一助となれば幸いです。

本展示の趣旨をご理解いただき、様々なご協力をいただいた方々に感謝いたします。

金沢大学資料館

金沢大学附属図書館

## 宮下 孝晴

金沢大学の沿革をひもとけば、その母体となつたのは第四高等学校のほか、石川師範学校、金沢高等師範学校、石川青年師範学校、金沢医科大学、金沢医科大学附属薬学専門部、金沢工業専門学校があります。今回の展示企画は石川師範学校、金沢高等師範学校、石川青年師範学校に焦点を当て、教育に力を注いだ石川県との関わりの中で、その歴史と実態を豊富な歴史資料によって検証しようとするものです。

昭和二十四年(一九四九)に金沢大学が新制大学として出発した時、教員養成機関としての役割を引き継いだ教育学部に移管された教材や資料ばかりではなく、今回の展示企画を機に各師範学校の同窓会や出身の方々の御協力で集められた貴重な写真や各種教材、校旗や校章、卒業証書などは師範学校の生活と時代を生き生きと語ってくれるにちがいありません。この機会に、その前身校時代以来、今日にいたるまで金沢大学が果たしてきた地域における教員養成の役割と歴史を振り返り、来年度から8学部制から3学域に大きくシフトして再出発する新生金沢大学の中で、新たな教育への展望を地域の皆様といっしょに考えてみたいと思っています。

(金沢大学資料館長・教育学部教授)

# 教員養成の過去とこれから

江森 一郎

「教員養成はいかにあるべきか」は、おおげさに言えば、日本の将来を決める問題である。

学歴や取得資格が職業選択の大きな要素となっている今日、学校教育への関心が「異常に」といっても良いほど高まっている。このような状況下で、文部科学省もすでに教員になった人のための現職研修制度の改革とともに、教員養成制度改革に特に力を入れている。そしてその可否はともかく、本年六月二十日の新「教育職員免許法」により教員免許更新（十年間）制度が導入されることが決まった。

大学教育を含め教育は主として教師が担うのだから、教師をどのように養成するかは、ある意味で学校教育全体の根本問題である。この展示で扱うのは、主として明治と昭和戦前期の小学校教師養成の歴史であるが、今回の展覧会を機会に日頃教員養成に関心の薄かった方たちも教師養成や教師のありかたを考える機会にしていただけは幸いである。

明治五年（一八七二）の学制の頒布から日本の近代学校制度が整備されたのはよく知られている。組織的な教員養成の歴史もここから始まる。江戸時代には寺子屋が発達し、幕末には全国津々浦々に普及した（正式な調査結果は存在しないが、その数は数万と推定される。ちなみに近代以後現在にいたる小学校数は、大体二万五千校）が、組織的に寺子屋師匠が養成するという考え方は存在しなかった。

学制以後、直ちに東京に師範学校がつくれ、各県には小学教員伝習校出身教師がすべて「師範タイプ」であったというのではないことは言うまでもないが）

敗戦後の教師教育改革は、このような過去の教師養成への強い反省から「小学校教員をふくめた教員養成」を大学で行うということと、教師は計画養成されねばならない面があり教員養成学部が原則として各県に一つずつ設けはしたが、教員養成学部以外の学部の学生にも一定の教職科目を修得すれば教員免許を取得できるとする「開放性」を二大原則とした。教師の知識・教養水準を高め、どの学部にも所属しようと、本当に教師になりたい人が自ら望んで教師になってほしいという原則を立てたのである。この教員養成制度の百八十度の転換の推進役は自ら受けてきた戦前の師範教育を「益裁教育」と自己否定した戦後初期の学校教育局師範教育課長（昭和二十四年（一九四九）大学学術局教職員養成課長、のちに福岡教育大学学長）玖村敏雄であったことは記憶に留めておく価値がある（山田昇『戦後日本教員養成史研究』一九九三参照）。しかし、この高い理想も実現が難しかった面もあり、今日に至っている。

ところで、今の教育学部学生と話していて驚くのは、彼（彼女）らの多くは教育学部へ入学すると小・中学校での教え方を中心に教えてくれるものとイメージしていることである。現在の教員養成学部では教員免許法に準拠したカリキュラムを組んでおり、一九九八年改正の現行免許法が教職科目や教科教育法の授業の単位数が多くなっているため、それ以前の教育学部より学生のイメージに近いといえる。しかし、大学の存在意義が厳しく問われている時代ではあるが、本来大学は就職のためのノウハウを効率的に教える職業準備的存在だけではなく、あくまでも自ら科学や文化の最先端や蘊奥を窺える教育を提供してゆく場であろう。

金沢大学の来年度からの改革で教育学部は改組され、人間社会学域の中の学校教育学類として再出発する。金沢大学の教員養成の核になるは

所や師範講習所が創設され、その後女子師範学校、高等師範学校・女子高等師範学校・青年師範学校などがつくられてきた。石川県では明治七年八月に「年令大凡二十歳以上三十五歳以下」を入学資格とした集成学校を創立したが、これが後の石川県師範学校の前身である。

その後の各種師範学校の歴史は、別稿があるのでそちらを参照していただくとして、ここでは戦前の師範教育に対する反省の上に築かれた戦後の理想主義的な教員養成の理念を戦前の師範学校教育との対比で少し説明しておきたい。

一言で言うと、戦前の急ごしらえの「近代国家」はその構成員（国民）の育成を義務教育に委ねようとし、過酷な訓練を教師の卵に強いた。教師養成に特別な使命感を持った森有礼が文部大臣に就任し、師範学校令を定めた明治十九年以後、全員寄宿制による軍隊的生活訓練方式や「兵式体操」の採用と完全な給費制度とそれと連動した卒業以後の長期教職就職義務制度がセットにされ、それが全国一律に実施させた（水原克敏『近代日本教員養成史研究』一九九〇参照）。その後、詳論しないが（旧制）中学校卒業を入学条件とする「二部」生の採用など多少の教員養成の理念にかかわる政策の変更はあったが、基本構造は維持され、師範学校で養成される教師の多くは、学問や研究の本質にふれえない卑屈で裏表がある性格の強いいわゆる「師範タイプ」の人間になってしまったと言われる。（もちろん戦前の石川県にも優れた教師がたくさんおり、師範学

ずのこの学類が戦前・戦後における教員養成の経験の反省の上に新しいグローバル化の時代を展望したほんとうの意味で意欲があり実力のある教師を学類の枠を越えて養成してゆく事を期待したい。

（金沢大学教育学部教授）



石川県師範学校校舎絵葉書（金沢大学附属図書館蔵）

# 教員養成の歴史と教育

明治五年（一八七二）学制の頒布とともに、国家の構成員としての「国民」を育成する、「師範学校」を中心とした教員養成の歴史が始まる。

石川県では、当初、加賀藩以来の教育的伝統を受け継ぎ、明治七年八月、小学校教員養成のための集成学校が開校した。しかし、十一月には石川県師範学校と改称し、近代国家による教員養成制度に組み込まれていく。その後、同十九年の師範学校令で石川県尋常師範学校となり、ここに兵式体操と軍隊式の全寮制生活による順良・親愛・威重の三氣質を備えた教員養成を目的とし、学資支給と卒業後の職務義務によって生徒を国家統制下においた師範教育の性格が確立した。第二次世界大戦後、師範教育は国家主義・軍国主義の温床として批判の対象となったが、他方全ての教科の教授法を短期間に習得した教員を養成できたという一面もあった。また、学資支給制度は、経済的に恵まれない子弟が勉強を続けていくための貴重なひとつの進路を提供した。明治三十一年、同校は石川県師範学校と名を変え、戦時中の昭和十八年（一九四三）、全国の師範学校とともに官立の石川師範学校として専門学校程度に昇格している。

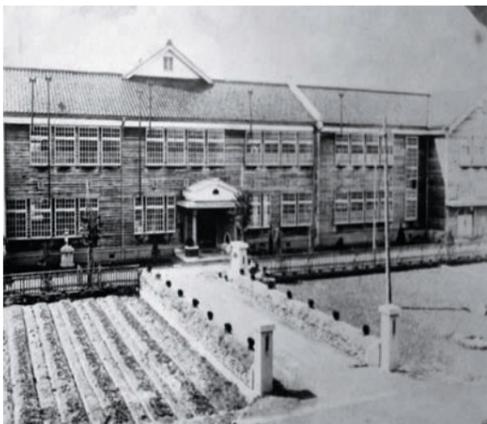
石川県の女性教員養成機関の成立は、地方では最も早く、明治八年に幼児教育者養成のため石川県女子師範学校が開校した。当初女性教員は社会的な認知度が低く、女子師範もいったん石川県師範学校に吸収されたが、明治三十年代の教員不足を背景に進学者を伸ばし、大正三年（一九一四）分離・独立している。昭和十八年には再び石川師範学校に統合され女子部となった。

このほか、県内の「師範学校」として、同十九年、戦争末期の中等学校教員不足、軍事目的の科学教育の振興を背景として金沢高等師範学校が設立している。これは中等学校の教員養成機関である全国七校の高等師範学校のひとつである。また同年には、勤労青少年の教育に当たる教員養成機関として、同じく官立の石川青年師範学校が開校している。

なお、石川県には、「師範学校」以外の教員養成機関として、明治三十年代以降各郡市に臨時の小学校教員養成所が設置され、大正十二年から第四高等学校に中等学校教員養成のための第十臨時教員養成所が、戦時下の昭和十八年には金沢高等工業学校に工業教員養成所が付設されている。以上の各「師範学校」は、戦後すべて金沢大学に包括された。



石川青年師範学校校舎・校門、昭和22年（個人蔵）  
金沢市野田町の校舎



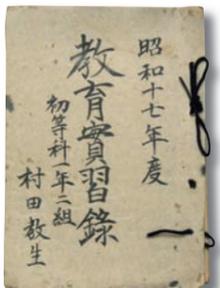
金沢高等師範学校校舎、昭和19年～20年（金沢大学蔵）  
金沢市中村町の校舎



卒業証書、昭和17年（財）石川県文教会館蔵  
石川県師範学校本科第一部卒業



国民学校教員免許状、昭和17年（財）石川県文教会館蔵  
石川県女子師範学校卒業生に授与された



教育実習録（個人蔵）  
石川県師範学校の生徒が、昭和17年5月11日～6月27日、附属国民学校で教育実習した時の記録

## Column

### 戦後石川における教員養成の選択肢

戦後の石川師範学校  
谷本 宗生

昭和二十年（一九四五）の段階で、全国に官立の教員養成諸学校は高等師範学校四校、女子高等師範学校三校、師範学校五十六校、青年師範学校四十七校、教員養成専門学校（農業教育・体育）二校、臨時教員養成所・実業学校教員養成所三十校の計百四十二校が存在していた。これらの教員養成諸学校を、いかに戦後の新学制下で処遇するのか、教育政策の課題とされた。戦前期の画一的・形式的な師範教育を是正するため、師範学校自らで協議を重ね、新しい教員養成の学課程を模索し始める。石川師範学校も、昭和二十二年一月、東京第一師範学校で開催された「教育大学創設準備協会全国大会」に参加している。全国各県に、教育大学を設置しようとする師範学校側の試みであった。

石川師範学校は、明治七年（一八七四）に小学校の教員を養成するために設置される。翌年、女性教員養成のために石川県女子師範学校を設置した。明治期以来、県立であった師範学校は、昭和十八年三月の「師範教育令」改正によって、専門学校に昇格して官立（国立）学校となる。同年四月、石川県女子師範学校を合併して、石川師範学校男子部・女子部が設置された。昭和二十二年五月、県内の教育関係者らが参集して、「石川学芸大学」創設準備会を組織する。柴野県知事を会長に、石川師範同窓会を中心に、一千万円の募金を目標に全県的に活動を展開した。

石川学芸大学を金沢に設置するためには、図書館等の施設・設備の充実が課題とされた。男子部二万四千七百五冊、女子部一万一千三百冊、校友会図書九百二十一冊（昭和二十一年の学校調査）では全体的な蔵書数も少なく、蔵書内容も自然科学・社会科学関係の文献が僅少であり、人文・社会・自然科学の領域を満遍なく満たすことが必要であった。その充実の具体策として、地元で宗教家や蔵書家でもあった暁鳥敏に五万冊の寄贈依頼を行い、暁鳥師から書物を十分に取納できるだけの書庫を用意するように注文を受けた。そこで、目標の募金額の内、五百万円余りを「暁鳥文庫」設置に充てることとした。実際には七十万円ほどしか集らず、当初の規模を大幅に縮小して、木造モルタル二階建ての書庫を昭和二十三年十一月に竣工した。

昭和二十二年十二月に入ると、石川師範学校は「大局的見地に立ち県下の要望に応え、学校の発展を望んで欣然総合大学の一環として参加すること」を、全教官、全生徒が認め石川学芸大学の構想は総合大学教育学部の構想に急転し、「石川県師範教育史」一九五三、三四七頁）ていく。昭和二十四年五月、新制国立大学の金沢大学に包括統合されて、金沢大学石川師範学校と改称する。昭和二十六年三月、七十有余年の歴史を有する石川師範学校は閉校した。戦後の石川師範学校は、全国的な情勢や文部省・GHQ・軍政隊の動向を的確に把握しながら、状況下で最良と考えられる選択判断を教官会議のもとで行った。教員養成の在り方が問題とされる今日、当時の「教官会議録」（金沢大学資料館所蔵）を改めて読んでみる価値はあるのではないだろうか。

（東京大学大学史史料室）

# 師範学校蔵書に見る 教科書と地域出版

師範学校の蔵書の中には、明治期以降の教科書類が数多く含まれている。これら教科書の変遷から、日本の近代教育の歴史やその地域的特徴を垣間見ることができる。

明治五年（一八七二）の「学制」で重点が置かれた小学校は、子どもたちが同じ教室の中で、同じ教科書を使って学ぶ一斉授業の形態がとられた。この年、東京に文部省直轄の師範学校（東京師範学校）が設けられ、学制実施にともなう新しい教員の養成とともに、小学校教科書の編集も行われた。文部省は府県に対して、文部省および東京師範学校編集の教科書の翻刻を許可したため、これらの教科書は急速に全国に普及した。地方ではこうした教科書の翻刻のほか、地方版の教科書の発行なども行われた。

石川県における教科書出版の中核を担っていたのが「益智館」である。益智館は、倉知新吾等が教科用図書刊行を目的に創立したもので、初めは出版会社と称し、後に益智館と改められた。「小学読本」「萬國地誌略」など主要な教科書の翻刻をはじめとして、「女のしつけ」「くりやのこころえ」「加賀地誌略」など、県内の師範学校や地元のエデュケーション関係者が編纂に携わっている教科書の発行も手がけた。これらのことから、地域が一体となって教科書の作成・発行に取り組んでいた姿がうかがえる。

明治期の石川県師範学校においては、『国史略』『物理階梯』『西洋事情』『輿地誌略』などが教科書として用いられていた（『石川県師範教育史』

一九五三）。

明治十年代より、教科書の制度を整えて、国家の統轄を強めようという動きが見られた。明治十九年、初代文部大臣の森有礼による学制改革が実施された際、教科書の検定制도가成立した。検定制도는小学校のみでなく中学校および師範学校の教科書についても実施された。検定教科書になると地方出版の教科書は激減し、教科書の出版は東京に集中していった。この教科書の検定制도는、出版社と府県の審査委員との間の贈収賄など不正行為を多発させ、明治三十五年の大規模な摘発により、師範学校長など各府県の教育界の指導的地位にある人々が検挙される事態となった。この「教科書事件」を契機として、小学校教科書の国定制が実施されることとなった。

明治三十七年より小学校では国定教科書が使用され始める。その後、時勢の変化に伴い、四度の大幅な修正が行われる。昭和に入ると、明るい色刷りの挿絵も多く見られるようになるが、内容的には国家主義的思想が反映されるようになる。教育内容に対する国家統制が強まるにつれ、中等学校および師範学校では昭和十八年から、青年師範学校では昭和十九年から教科書が国定となった。

また、昭和十二年に文部省より出された『国体の本義』や、それに続く『臣民の道』などは戦時下に必須の読み物として各学校に配布され、師範学校などでも教科書として用いられた。

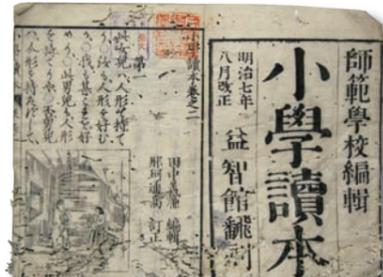
昭和二十年の第二次世界大戦の終戦後は、戦時中の教科書はそのままでは使用できなくなり、軍国主義的な部分などを削除するため、該当箇所に墨を塗ったり、切り貼りした教科書が使用された。昭和二十一年度はこれらの部分を削除した粗末な仮綴分冊の教科書が発行された。昭和二十二年から新学制が実施され、教科書も国定制を廃止して検定制に改められた。



『尋常小学修身書』  
文部省、日本書籍、明治37年（金沢大学附属図書館蔵）  
国定教科書期（第一期）



『尋常小学修身書』  
重野安経編輯、八尾新助、明治26年〔訂正3版〕（金沢大学附属図書館蔵）  
検定教科書期



『小学読本』  
師範学校編輯、益智館翻刻、明治7年（金沢大学附属図書館蔵）  
初版は明治6年。卷一、卷二は当時アメリカで普及していたウィルソン・リーダーの翻訳によって作られている。明治7年の改正版では不自然な直訳を改め、内容についても全体にわたり修正が行われている。この小学読本は、多くの府県の教則の中に読物の教科書として示された。ほとんど全ての府県で翻刻され、非常に普及した教科書である。



『西洋事情』  
福澤諭吉纂輯、慶応義塾出版局、明治3年（金沢大学附属図書館蔵）  
明治初期には、民間の啓蒙運動に関連して編集、翻訳された書物が多数出版され、これらは教科書としても用いられた。また、西洋近代科学の輸入に伴い、理科関係の翻訳教科書も多数出版されている。



『師範育児保健』  
文部省、師範学校教科書株式会社、昭和21年（金沢大学附属図書館蔵）  
仮綴分冊教科書



『師範歴史』『師範教育』  
文部省、師範学校教科書株式会社、昭和19年（金沢大学附属図書館蔵）  
師範国定教科書

# 郷土教育

大正期から、初等教育において、郷土の歴史や地理、自然、生活、文化等を教材とし、そうすることで、郷土の現実を認識・理解して郷土の再編を目指す、あるいは郷土愛・愛国心を育成する、郷土教育がさかんとした。

昭和五年（一九三〇）、文部省が全国の師範学校に対し郷土研究施設費の補助を開始し、石川県でも石川県師範学校・同附属小学校・石川県女子師範学校に郷土教育資料研究費が支給された。これを受けて、同七年石川県師範学校に郷土教育の理論的究明と実践のため、郷土館が設立された。『郷土研究資料目録』（石川県師範学校）によれば、同館は三つの研究室からなり、第一室は、郷土の地図・地誌・写真などの地理的参考資料のほか、郷土教育の参考文献や統計書を備えた生徒の自習室として利用され、第二室は郷土の自然・産業に関する資料を蒐集し、第三室は郷土の文化・歴史・人物に関する資料を蒐集・陳列して、生徒の郷土研究に資する機能を持っていた。その後、資料が増加したのか、第四室まで設けられている。また同年には、女子師範学校にも郷土室が新築された。

こうした郷土教育の中で生徒自身によって作成された掛図や論文が、本学教育学部や附属図書館に残されている。

# 女子教育

明治五年（一八七二）の「学制」以降、義務教育の機会は基本的に男女均等であるべきとされたが、当初はまだ女子教育が急激に進展する状況ではなかった。

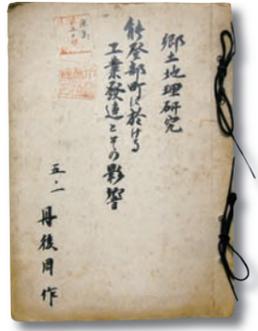
石川県では学制の実施当初から女子の初等教育に力を入れ、明治六年には石川県女小学校が創立された。その後、県下の小学校を男女別学の方式にする方針を示し、主要な地域には女児小学校が開設された。この男女別の小学校の設置は、石川県において女子初等教育を普及させることとなった。

女児小学校の普及に伴い、女性教員の養成の取り組みも始まる。明治八年五月、文部省の認可を得て、石川県女子師範学校が設立される。明治七年にできた官立の東京女子師範学校に続き、公立としては最初の女子師範学校である。石川県女子師範学校は、名称の変更、石川県師範学校（男子）との合併・分離を繰り返しながら、昭和二十六年（一九五一）に閉校となるまで、女性教員養成の場として重要な役割を担った。

明治以降、女子の教育は家事・裁縫などを中心とした良妻賢母主義で、その傾向は昭和に入っても続いた。そのような中、女子師範学校は、単に女性教員の養成の場というだけでなく、より高度な教育を提供する場ともなり、女性の社会進出の機会を増やした。



歴代九谷焼作風標本・青木木米（金沢大学資料館蔵）



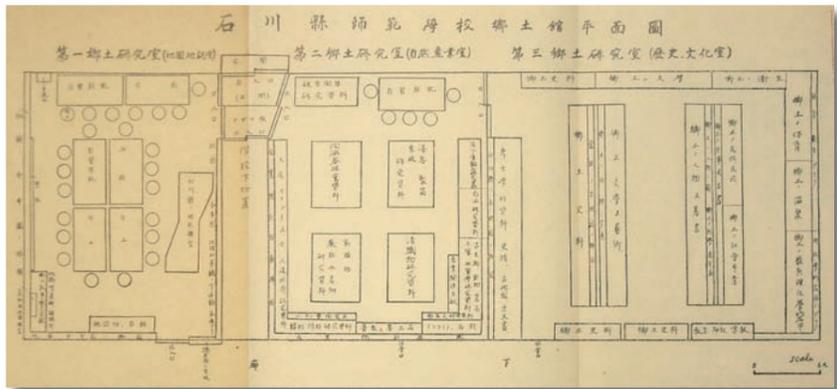
『郷土地理研究 能登部町に於ける工業発達とその影響』（金沢大学教育学部蔵）



『儀式風俗図絵』  
巖如春画、昭和8年（金沢大学附属図書館蔵）  
昭和5年以降、師範学校に対して郷土研究施設費が交付され、各師範学校では史料や図書の購入および模型制作をすすめた。石川県女子師範学校は、金沢の画家であった巖如春に「加賀藩年中行事図絵」および「儀式風俗図絵」の制作を依頼する。これは郷土教育の教材であると同時に、図絵を鑑賞することで、女子生徒が昔ながらの日本女性の気風に立ち戻るようにと意図されたものであった。



『くりやのころえ』  
石川県第一女子師範学校纂輯、益智館、明治13年（金沢大学附属図書館蔵）  
伝統的な厨（くりや、台所）の心得全般が記されている。



石川県師範学校郷土館平面図（『郷土研究資料目録』（金沢大学資料館蔵）より）

# 青年教育

明治二十年代から、尋常小学校後の勤労青少年への実務教育機関として県内各地で実業補習学校が設置され、農業技術の指導などが主として行われた。これとは別に、大正十五年（一九二六）入営前の十六歳以上の男子に軍事教練を主体とした訓練を施す青年訓練所が設置された。

しかし、この実業補習学校と青年訓練所は、教育を受ける対象がほぼ重複していたことから、両校を統合し、昭和十年（一九三六）職能実務教育と軍事教練を行う青年学校が制度化され、県内各地に設立された（同十四年から男子のみ義務制となった）。

そこで同十二年、青年学校の教員養成を目的として石川県立青年学校教員養成所と同女子青年学校教員養成所が設立され、農業科に重点をおいた教育が実施された。また翌十三年には、教員の需要増大により、小学校本科正職員の免許状所有者を対象に臨時教員養成科が松任農学校に附設された。こうして地域の青年学校では、養成所卒の教官から、普通教育の補習と農業指導、軍事教練が施された。

同所は、昭和十九年官立の石川青年師範学校となり、師範教育の一環として石川師範学校・金沢高等師範学校と同じく師範教育令の中に位置づけられたが、戦局の悪化に伴い、青年学校は軍事教練、食糧増産、軍需生産に挺身する場となっていった。

戦後、新義務教育制度により青年学校は廃止され、以後の勤労青少年に対する教育は定時制高等学校や公民館による青年学級などに移行して

いった。同時に、石川青年師範学校における教員養成も、新制中学校の職業科・家庭科の教員養成へと方針が変更されることとなった。



校舎を背に見事な白菜畑と生徒達（個人蔵）



青年学校用教科書、昭和12年～18年刊行（財石川県文教会館蔵）

# 特別科学教育

金沢高等師範学校が創設された昭和十九年（一九四四）の十二月、戦況が悪化する中、文部省の指示により同校教授陣による「特別科学教育研究班」が設置された。全国では、他に東京高等師範学校など五か所のみ設けられた。

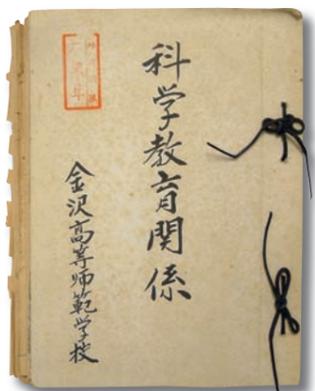
太平洋戦争の末期、米軍の圧倒的な科学的軍事力と物量を目前にした日本では、科学技術力の飛躍的向上が至上課題となり、「科学技術二俊秀ナル資質ヲ有スル」学徒への高度な英才教育を施し、「科学決戦」に勝利する科学者を養成するねらいがあった。

金沢高等師範学校の「特別科学教育学級」は、同二十年一月、全国のトップを切って開始。北陸地域の中等学校一・二年生の生徒および国民学校などの四・五年生児童から選抜された学徒は、数学・理科・科学工作・英語などの授業や、生徒各自による自由研究の授業を大幅に増やしたカリキュラムのもと、高度な内容の英才教育を受けた。生徒の自由研究は、空中ケーブルカーや水雷艇、雲母製飛行機や電気機関車の研究製作、火薬の研究、海水塩分測定法研究など、高度かつ実践的なものであり、同校では同年六月に第一回特別科学学級成績発表会が開催され、その成果が内外に披露された。

しかし終戦後、「特別科学教育」は昭和二十二年三月三十一日で廃止、生徒の大部分はそのまま金沢高等師範学校附属中学校へと編入された。



特別科学教育研究学級での実験風景（金沢大学蔵）



「科学教育関係」文書（金沢大学資料館蔵）

# 学生たちの生活

「我々の世代では、ほとんどが校歌より寮歌に親しみを感じているであろう」（『石川師範同窓会百十年記念誌』一九九八）。ある卒業生がこう述懐するように、原則として全員入寮の寄宿舎生活の思い出は、彼らの心に深く刻まれたが、寄宿舎は師範教育史をみるうえで不可欠な制度でもある。

明治十九年（一八八六）に公布された師範学校令は、その後数十年に及ぶ学制の基礎となったが、同令に規定する三氣質（順良・信愛・威重）鍛錬の場として全寮制寄宿舎が重視されていた。これは当時の森有礼初代文相の国家至上主義の教育観を反映したもので国体主義教育と呼ばれ、軍隊式教育を師範学校において試みたことによるものである（『文部省編』『学制百年史』一九七二）。

寄宿舎生活は朝夕の点呼から就寝まで時間きざみであり、学年間の序列の中で集団指導体制で行われた。ある時期の師範生の日課を見ると、平日は五時半に起床し朝礼点呼のあと直ちに朝食。授業は昼食を挟み午後三時まで五十分授業の七限。夕食の六時までが自由時間となり、食事後七時から黙習（自修）で八時半の夕礼のあと九時に消灯となる。

生まれて初めて親元を離れての厳しい寄宿舎生活は、食事も喉を通らぬこともあった。戦時下の生徒の日記には、休暇に帰省したときも氏神に早朝参拝し、境内で体操、乾布摩擦を行うなど、寄宿舎を離れたときでも規律ある生活を守っていたことが記されている。

女子師範の寄宿舎生活においても、規則正しく、清潔整頓、衛生に注意深く、時間励行等の指導が行われていた。

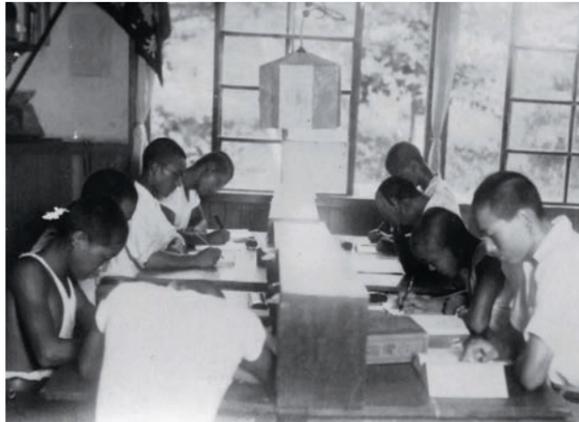
そんな中、学友会活動や寄宿舎の食堂の出店で掛け払いで食事ができる一杯のうどんは、彼らの数少ない楽しみであった（『石川県師範教育史』）。



各師範学校の学友会雑誌（財石川県文教会館蔵）



石川県師範学校男子寄宿舎絵葉書（金沢大学附属図書館蔵）



寄宿舎での勉強（個人蔵）



寄宿舎での大掃除（個人蔵）



寄宿舎での入浴（個人蔵）



懸垂運動（金沢大学教育学部蔵）

## Column

### 明治時代の「体操」と用具

大久保 英哲

体育という教科は戦前まで「体操」と呼ばれた。この「体操」科が全国津々浦々の小学校にまで行われるようになったのは、明治十年代末のことである。この時の主要な教材は「軽体操」といい、徒手あるいは木製のダンベルや棒などを持ち、教師の号令に合わせて一斉に体を動かす集団の体操である。体を鍛えたり、運動能力を向上させるというよりは、心身の健康を保持するために軽く体を動かすもので、わずかに負荷をかけるため用具を手にする。もともとはアメリカ人医師リーランドが明治十一年（一八七八）に体操伝習所（現筑波大学体育専門学群）の教官となって指導した体操法である。

石川県師範学校では明治十五年から十七年にかけて三名の教員をこの体操伝習所に派遣してその指導法を学ばせ、帰県後師範学校で生徒たちに伝授した。明治十七年頃にはその効あつて県内各地で師範学校の卒業生たちが体操を実施し始めた報告が上がり始める。

さて、用具である。ダンベルは「dumb-bell」、字義通り「鈍鈴」、Indian-club は「棍棒」、bar-bell は「棒」と訳された。これらの指導法や用具製作法をまとめたのが国初の体操教科書が体操伝習所『新撰体操書』（明治十五年）である。（写真参照）桜、ヤマクワ、ケヤキ等を用いる。例えば鈍鈴（男子用）は長さ八寸二分（約二十五cm）、柄の長さ三寸二分（約十cm）、柄の直径九分一寸（約三cm）、球の直径二寸三分（約七cm）。重さの指定はない。

一斉指導の体操には、少なくともクラス分の用具を必要とする。これらはいったいどこから供給されたのだろうか。

この近代教育の一翼を担い、製作供給元になったのは江沼郡山中村（現加賀市山中町）の伝統漆器産業であった。山中漆器は椀や木皿等の日常的な丸物漆器が有名であり、多少の収縮や脆弱性はあっても、小木を丸木のまま用い、またこの段階でろくろを使う工程が発達していた。このノウハウを生かし、木地挽職人森山定吉は、山中村と鹿島郡二宮村でこの体操器具を製造販売した。いわば石川県最初のスポーツ用品製造販売業者である。『石川県学事報告』や『文部省年報』に「その廉価なると品質の佳良なるをもち、体操科の普及を助けた」と記載されるほどであった。残念ながら軽体操はその後教材価値が疑問視され、明治二十年代以後は兵式体操、やがてスウェーデン体操に取って代わられるのであるが、明治十年代末、近代教育を象徴する「体操」科の普及に伝統地場産業が果たした役割は大きかったのである。

（金沢大学教育学部教授）



『新撰体操書』体操伝習所、明治15年（金沢大学附属図書館蔵）

# ■ 出品目録

	資料名	年代	所蔵者
<b>石川県の各師範学校の歴史</b>			
1	石川師範校章		財石川県文教会館
2	石川師範学校校旗		金沢大学資料館
3	石川青年師範学校校旗		金沢大学資料館
4	金沢新市街地図	昭和12	金沢大学附属図書館
5	金沢勝地賑双六	明治10年代	石川県立歴史博物館
6	卒業証書	昭和17	財石川県文教会館
7	修了証書	昭和18	財石川県文教会館
8	卒業証書	昭和17	財石川県文教会館
9	修了証書	昭和22	財石川県文教会館
10	卒業証書	昭和23	個人蔵
11	卒業証書	昭和25	個人蔵
12	明朗歌為 扁額		金沢大学資料館
13	剛健醇美 扁額		金沢大学資料館
14	第一男女・第三男女師範学校辞祝	明治10年	金沢市立玉川図書館 近世史料館
15	小学校教員試目及第証書	明治13	金沢市立玉川図書館 近世史料館
16	石川県師範学校修了証書	明治19	金沢市立玉川図書館 近世史料館
17	春季剣術試合一等賞授与書	明治29	金沢市立玉川図書館 近世史料館
18	石川県尋常師範学校生徒写真	明治24~30	金沢大学資料館
19	石川県尋常師範学校年報第4~9	明治23~28	金沢大学附属図書館
20	母校新築落成記念号	大正4	金沢大学附属図書館
21	校舎新築落成記念写真帳	大正5	石川県立図書館
22	石川県女子師範学校(石川県立金沢第二高等女学校)校地校舎図	昭和7	金沢大学資料館
23	眺鳥敏胸像	昭和23	金沢大学附属図書館
24	眺鳥文庫看板	昭和25	金沢大学附属図書館
25	永井柳太郎 眺鳥敏宛書簡	昭和9	金沢大学附属図書館
26	眺鳥文庫落成記念式写真	昭和23	金沢大学
27	石川県師範学校卒業アルバム		財石川県文教会館
28	学資等領収書	昭和13	個人蔵
29	制服用ボタン		財石川県文教会館
30	級長ヲ命ス	昭和12	財石川県文教会館
31	皆勤証	昭和17	財石川県文教会館
32	石川県女子師範学校合格通知書及び封筒	昭和18	個人蔵
33	石川師範学校女子部入学式案内通知ハガキ	昭和18	個人蔵
34	金沢高等師範学校制服用バッジ・袖用バッジ	昭和19	金沢大学資料館
35	金沢高等師範学校理科一類バッジ	昭和19	金沢大学資料館
36	金沢高等師範学校卒業アルバム	昭和23	金沢大学資料館
37	石川青年師範学校校舎・校門	昭和22	個人蔵
38	運動場より眺めた校舎や桜並木	昭和22	個人蔵
39	校舎と桜並木	昭和22	個人蔵
40	卒業記念写真・手作りの制服を着て	昭和21	個人蔵
41	青年師範学校校章	昭和19頃	財石川県文教会館
<b>教員養成と師範教育</b>			
42	国民学校教員免許状	昭和17	財石川県文教会館
43	国民学校教員免許状	昭和17	財石川県文教会館
44	教員免許状 中学校・高等女学校	昭和23	個人蔵

	資料名	年代	所蔵者
45	石川師範学校卒業証書	昭和19	財石川県文教会館
46	小学校教員免許状 修身教育・国語・算術・歴史・理科・地理・体操・音楽・図画	昭和16	財石川県文教会館
47	第十四回教員学力補充講習会修了証書	昭和16	財石川県文教会館
48	石川県主催代用教員養成講習会修了証書	昭和16	財石川県文教会館
49	石川県石川郡犀川村立青年学校指導員嘱託任命状	昭和16	財石川県文教会館
50	国民学校教員免許状	昭和19	財石川県文教会館
51	教育実習録	昭和17	個人蔵
52	教育実習写真		個人蔵
53	こん棒・アレイ		金沢大学教育学部
54	新撰 体操書	明治15	金沢大学附属図書館
55	教育勸語習字帖	明治24	金沢大学附属図書館
56	師範学校 修身教科書 第三	明治39	財石川県文教会館
57	講習科用 修身教科書 上巻	大正2	財石川県文教会館
58	生徒思想の動向と其対策	昭和10	金沢大学附属図書館
59	皇紀2601年卒業アルバム	昭和16	個人蔵
60	修養道場鞍ヶ嶽明倫堂概要	昭和12	金沢大学附属図書館
<b>戦時体制への動員</b>			
61	沖繩戦参戦連名血判状	昭和20	個人蔵
62	賞状 功労賞	昭和20	財石川県文教会館
63	勤労報国隊写真	昭和15	個人蔵
64	スタンプ及びスケッチ帖 其ノ三	昭和15	個人蔵
65	学徒動員出動の通知及び封筒	昭和20	個人蔵
66	学徒動員出動中の健康保険証	昭和20	個人蔵
67	学徒動員出動中の記念写真	昭和20	個人蔵
68	学徒動員出動中の卒業写真	昭和20	個人蔵
69	作業日誌	昭和20	金沢大学資料館
70	勤労動員事務手控	昭和20	金沢大学
<b>学生たちの生活</b>			
71	石川県師範学校男子寄宿舎絵葉書		金沢大学附属図書館
72	石川師範学校寮生手帳	昭和17~	財石川県文教会館
73	寮生人員点呼表	昭和19	財石川県文教会館
74	石川師範学校女子部寄宿舎入舎心得		個人蔵
75	会誌 51号	昭和4	財石川県文教会館
76	学友会雑誌 第36・37号	大正6・7	財石川県文教会館
77	交友会誌 第12号	大正15	財石川県文教会館
78	無限 創刊号	昭和22	金沢大学資料館
79	かがみ	昭和24	財石川県文教会館
80	農芸部年報 1948・1949年版	昭和24	財石川県文教会館
81	農芸部年報 1950年版	昭和25	財石川県文教会館
82	関東地方修学旅行日誌		個人蔵
83	石川県師範学校運動会絵葉書	明治39~大正3	金沢大学附属図書館
84	石川県師範学校運動会プログラム	大正14	金沢大学附属図書館
85	四十年水泳者高浜海岸写真	明治40	金沢大学資料館
86	石川師範学校写真		個人蔵
87	女子寮前で全員集合	昭和20	個人蔵

	資料名	年代	所蔵者
88	石本先生と堀口先生を囲んでの収穫祭	昭和20	個人蔵
89	青師中部大会(長野市)優勝を祝し善光寺前に集合した選手・応援団	昭和21	個人蔵
90	青師中部大会宿舍前に集う応援団	昭和21	個人蔵
91	青師中部大会優勝バレー部メンバー	昭和21	個人蔵
92	中部青師大運動会写真	昭和22	個人蔵
93	師範学校・青年師範学校ハンドボール全国大会写真	昭和22	個人蔵
94	青年師範体育大会写真	昭和23	個人蔵
<b>教科書と地域出版</b>			
95	格物入門	明治2	金沢大学附属図書館
96	西洋事情	明治3	金沢大学附属図書館
97	物理階梯	明治7	金沢大学附属図書館
98	改訂増補 新撰数学	明治11	金沢大学附属図書館
99	小学読本	明治7	金沢大学附属図書館
100	萬國地誌略	明治10	金沢大学附属図書館
101	加賀地誌略	明治11	金沢大学附属図書館
102	改訂 加賀地誌略	明治14	金沢大学附属図書館
103	石川県地誌	明治22	金沢大学附属図書館
104	尋常小学修身	明治26	金沢大学附属図書館
105	尋常小学修身書	明治37	金沢大学附属図書館
106	尋常小学修身書	明治43	金沢大学附属図書館
107	師範歴史	昭和19	金沢大学附属図書館
108	師範教育	昭和19	金沢大学附属図書館
109	国体の本義	昭和12	金沢大学附属図書館
110	臣民の道	昭和16	金沢大学附属図書館
111	師範育児保健	昭和21	金沢大学附属図書館
<b>郷土教育と師範学校</b>			
112	金沢城下町割絵図	昭和10	金沢大学教育学部
113	郷土研究資料目録	昭和7	金沢大学資料館
114	写真帳		金沢大学教育学部
115	銅鏡レプリカ(木製箱入)		金沢大学教育学部
116	郷土史料:歴代九谷作風標本		金沢大学資料館
117	日本神社様式 並 鳥居一覽表	昭和11	金沢大学教育学部
118	能美郡二ヶケル蘭草栽培状態二就テ		金沢大学教育学部
119	郷土地理研究 能登部町に於ける工業発達とその影響		金沢大学教育学部
<b>女子教育と女子師範学校</b>			
120	加賀藩年中行事図絵	昭和7	金沢大学附属図書館
121	儀式風俗図絵	昭和8	金沢大学附属図書館
122	くりやのころえ	明治13	金沢大学附属図書館
123	女のしつけ	明治12	金沢大学附属図書館
124	版權免許之證	明治12	株式会社うつのみや
125	習字手本版木		株式会社うつのみや
<b>青年教育と青年師範学校</b>			
126	校舎を背に見事な白菜畑と生徒達	昭和20	個人蔵
127	青年学校教科書 普通学科 巻二	昭和15	財石川県文教会館
128	漁村読本 第六	昭和13	財石川県文教会館
129	農業教科書 土壤肥料篇	昭和12	財石川県文教会館
130	青年修身公民書 巻三	昭和18	財石川県文教会館

	資料名	年代	所蔵者
131	青年学校 修身及公民科教科書 巻二	昭和16	財石川県文教会館
132	裁縫教科書 上巻	明治39	財石川県文教会館
133	統合 家事教科書	昭和14	財石川県文教会館
134	青年学習書 巻六	昭和9	財石川県文教会館
135	青年学校 統合教科書 巻一	昭和15	財石川県文教会館
136	女子青年学校教本 普通学科 巻三	昭和18	財石川県文教会館
137	青年学校教本 修身及公民科 巻二	昭和16	財石川県文教会館
138	青年学校経営	昭和12	金沢大学附属図書館
139	和牛	昭和24	金沢大学附属図書館
140	蔬菜採種園芸	昭和23	金沢大学附属図書館
141	肥料の統制及配給	昭和16	金沢大学附属図書館
142	改訂 農作害虫精説	昭和11	金沢大学附属図書館
<b>特別科学教育と金沢高等師範学校</b>			
143	科学教育関係		金沢大学資料館
144	金沢高等師範学校創立記念写真帳		金沢大学
145	Mathematica	昭和25	金沢大学資料館
146	海の科学	昭和24	金沢大学附属図書館
147	ノート 動物学 ZOOLOGY I		財石川県文教会館
148	ノート 動物学 ZOOLOGY II		財石川県文教会館
149	ノート 動物学 ZOOLOGY III		財石川県文教会館
150	ノート 生理学 PHYSIOLOGY (I)		財石川県文教会館
151	ノート 生理学 PHYSIOLOGY (II)		財石川県文教会館
152	ノート 生理学 PHYSIOLOGY (III)		財石川県文教会館
153	ノート ANIMAL HISTOLOGY		財石川県文教会館
154	ノート 植物学 I (BOTANY)		財石川県文教会館
155	ノート 植物学 II (BOTANY)		財石川県文教会館
156	ノート BOTANY III		財石川県文教会館
157	ノート Ecology Physiology (IV)		財石川県文教会館
158	ノート 動物生態学		財石川県文教会館
159	ノート 地学 (I)		財石川県文教会館
160	ノート 地学 (II)		財石川県文教会館
161	代数学講義	昭和21	財石川県文教会館
162	初等整数論講義	昭和21	財石川県文教会館
163	訂正 最小自乗法	昭和21	財石川県文教会館
164	接続の幾何学	昭和22	財石川県文教会館
165	微分幾何学	昭和21	財石川県文教会館
166	郡論	昭和21	財石川県文教会館
167	函数概論	昭和21	財石川県文教会館
168	力学通論	昭和22	財石川県文教会館
169	改訂 物理学 上巻	昭和18	財石川県文教会館
170	改訂 物理学 下巻	昭和21	財石川県文教会館
171	代数的整数論	昭和23	財石川県文教会館
172	古事記抄	大正11	財石川県文教会館

## 協力者

(財)石川県文教会館  
 石川県立図書館  
 石川県立歴史博物館  
 株式会社うつのみや  
 金沢市立玉川図書館近世史料館  
 安達實  
 在田則子  
 奥田晴樹  
 清原岑夫  
 五味武臣  
 菅村暲  
 鈴森庸雄  
 田嶋万希子  
 田中昭子  
 深川明子  
 水原克敏  
 宮口尚義  
 本康宏史  
 山瀬晋吾  
 鷺山靖

## 編集・執筆者

池上佳芳里  
 伊藤美和  
 江森一郎  
 大久保英哲  
 奥野麻理子  
 川添真澄  
 谷本宗生  
 野村洋子  
 橋洋平  
 堀井美里  
 宮下孝晴  
 村田勝俊  
 (50音順・敬称略)

石川師範学校男子部同窓生  
 坂本仙之介・神宮弘・滝速雄  
 道端孫左エ門  
 石川師範学校女子部同窓生  
 上島洋子・小林綾子・小泉しげ・山形朝子  
 金沢高等師範学校同窓生  
 小島和夫・羽場究・棒田実・宮崎光二  
 深山哲  
 石川青年師範学校同窓生  
 久保繁子・高西喜久松・洞庭弘・中森智  
 早川恒夫  
 金沢大学教育学部同窓生  
 荒木善彦・小山田秀一・野村祐治  
 (50音順・敬称略)

### 【会期日程】

平成19年10月15日(月)～11月16日(金)  
 9:00～17:00 ※期間中無休

### 【場 所】

金沢大学資料館展示室

平成19年度資料館・附属図書館シンポジウム  
 「金沢大学3学域化と総合大学の教員養成の新機軸―地域における教員養成の過去・現在・未来―」

2007年10月29日(月)13:30～16:30  
 会場：金沢大学大学教育開放センター

## 石川県の各師範学校年表

\* 青字は石川師範学校男子部、ピンク字は同校女子部、緑字は石川青年師範学校、茶字は金沢高等師範学校の系統を表す

西暦	年号	各師範学校の系譜	社会の動き
1874	明治7	小学校教員養成のため、兼六園成巽閣石川県英学校内に集成学校開校(8月) 仙石町の石川県変則中学校跡へ移転、附属小学校開校(10月) 集成学校を、石川師範学校と改称(11月)	明治5 学制頒布
1875	明治8	松原町女児小学校内に石川県女子師範学校開校(5月) 附属小学校を設置(7月) 師範学校支校を大聖寺・輪島に設置(8月)。(以後県域の変遷とともに推移) 石川県女子師範学校を仙石町の石川県師範学校に移し校舎・校長を統合する(9月)	
1877	明治10	広坂通6番地に新築・移転(2月) 石川師範学校・同女子師範学校を、石川県第一師範学校・同女子師範学校と改称。その後、両校を石川県第一小学師範学校・同女子小学師範学校と改称(7月)	明治10 西南戦争
1880	明治13	石川県第一小学師範学校・同女子小学師範学校を、石川県金沢小学師範学校・同女子小学師範学校と改称(7月)	明治12 教育令公布、石川県内にコレラ流行 明治13 教育令改正
1881	明治14	石川県金沢小学師範学校・同女子小学師範学校を、石川県金沢師範学校・同女子師範学校と改称(10月)	
1883	明治16	石川県金沢師範学校と同女子師範学校を合併し、石川県師範学校(男子部・女子部)と改称(11月)	明治18 内閣制度創設 明治19 師範学校令、小学校令、中学校令、諸学校通則公布
1886	明治19	同窓会結成(2月)。石川師範学校を、石川県尋常師範学校と改称(12月)	
1887	明治20	学友会結成(9月) 文部大臣森有礼来校(10月)	
1889	明治22	広坂通88番地に新築・移転(11月)	明治22 大日本帝国憲法発布 明治23 教育勅語発布、第1回衆議院総選挙、第1回帝国議会 明治27 日清戦争
1896	明治29	小学校教員養成所を付設(4月)	明治30 師範教育令公布
1898	明治31	石川県尋常師範学校を、石川師範学校と改称(4月)	明治37 日露戦争
1913	大正2	石川師範学校男子部を、石川郡野村に新築・移転(4月)	大正3 第一次世界大戦
1914	大正3	石川師範学校女子部が広坂で独立し、石川県女子師範学校として開校。石川県立第二高等女学校を併設(4月)	
1915	大正4	金沢市広坂の附属小学校を、石川県女子師範学校に属す(4月)	大正6 ロシア革命 大正7 金沢で米騒動
1918	大正7	石川県立農業教員養成所を、石川郡松任町の石川県立農学校に付設(4月)	大正12 関東大震災。第四高等学校に第十臨時教員養成所付設
1921	大正10	石川県立農業教員養成所を、石川県立実業補習学校教員養成所と改称(4月)	大正14 治安維持法公布、普通選挙法成立
1925	大正14	高等師範学校の金沢誘致運動を県市合同で展開	
1926	大正15	石川師範学校・同女子師範学校に、専攻科設置(5月)	昭和12 日中戦争
1937	昭和12	石川県立実業補習学校教員養成所を、石川県立青年学校教員養成所と改称(4月) 河北郡津幡町に石川県立女子青年学校教員養成所開校(4月) 靱ヶ嶽明倫堂建設(10月)	昭和13 国家総動員法 昭和14 青年学校男子義務制 昭和16 太平洋戦争、国民学校令公布 昭和18 師範教育令改正。学徒出陣。金沢高等工業学校工業教員養成所付設 学徒勤労動員通年制実施
1939	昭和14	傷痍軍人尋常小学校准教員養成講習科設置(9月)	昭和20 戦時教育令。終戦
1941	昭和16	石川師範学校明倫報国団結成(4月)	昭和21 日本国憲法公布
1943	昭和18	石川師範学校と石川女子師範学校が合併し、官立の石川師範学校(男子部・女子部)として専門学校程度に昇格(4月)	昭和22 教育基本法・学校教育法公布
1944	昭和19	金沢市中村町に金沢高等師範学校開校。石川県立青年学校教員養成所と同女子青年学校教員養成所が合併し、津幡に官立の石川青年師範学校開校(4月)	
1945	昭和20	特別科学学級始まる(1月) 学友会・一真会結成(10月)	
1946	昭和21	金沢市野田町に移転(6月)。特別科学教育研究室発足(6月) 金沢市野田町180番地に移転(9月)	
1947	昭和22	教育大学創設準備協会全国大会に参加(1月) 金沢高等師範学校附属中学校創立(4月) 石川学芸大学創設準備会発足(5月)	
1948	昭和23	新制附属高等学校・同中学校付設(4月)	
1949	昭和24	石川師範学校女子部と石川青年師範学校を石川師範学校男子部校舎に収容(4月) 国立学校設置法公布により新制金沢大学が発足。石川師範学校・石川青年師範学校・金沢高等師範学校が包括される(5月)	昭和25 朝鮮戦争
1950	昭和25	警察予備隊駐留のため、野田町から金沢大学理学部校舎(旧四高校舎)へ移転	
1951	昭和26	石川師範学校、石川青年師範学校閉校	
1952	昭和27	金沢高等師範学校閉校	

(『金沢大学五十年史』通史編、『石川県教育史』等参照)



---

## 教える×学ぶ

—師範学校といしかわの教員養成史—

編集・発行：金沢大学資料館・金沢大学附属図書館

発行日：平成19年10月15日

印刷：能登印刷株式会社

---